日本福祉大学福祉社会開発研究所『日本福祉大学研究紀要－現代と文化』
第131号　2015年3月

〈エッセイ〉

天狗がつくられる村
――富山県高岡市C村の獅子舞調査――

西　島　千　尋

要　旨

富山県は獅子舞が盛んな地域と言われており，現在でも約1,200団体が継承しているとされる．それらは主に，「氷見型」「五箇山型」「砺波型」「加賀型」「射水型」「二頭型金蔵獅子」「一頭型金蔵獅子」「下新川型」「越後型」「行道型」に分類されるが，本エッセイは「氷見型」の獅子舞を受け継ぐ高岡市C村の調査にもとづくものである．

現代日本では祭礼の担い手不足が頻繁に取り沙汰され，その理由として少子化および高齢化，過疎化があげられることが多い．だが，C村の事例に着目すると，原因は必ずしもそれだけではないことが明らかになった．かつては獅子舞を含む村の行事へのコミットが自明視されていたが現代はそうではなくなった，つまり村の行事よりも個人の事情を優先させるという選択肢が生じていることにある．本エッセイでは，そうした事柄をC村で使用されている「天狗をつくる」という表現から考察する．

キーワード：獅子舞，コミュニティ，芸能，伝統

獅子舞と私

筆者は中学校2年生になる春，生まれ育った富山県高岡市C村から引越しをした．幼なじみたちと離ればなれになることも悲しかったが，同じくらい悲しかったのは獅子舞に参加できないということであった．富山県は，「日本一の獅子舞県」と言われている[1]．県内では現在も約1,200団体が継承しており，近年は獅子舞を職業とする集団を誕生させようとする試みもある[2]．

小学生の頃，同級生たちと「C村が一番や！」「ぜったいA町の方がいい！」「違う！B町！」と言い争い，担任の先生に「あなたたち，いい加減にしなさい」とあきれられた．当時は，ほかの町や村の獅子舞を観ることもなく「自分たちの獅子舞が一番」と信じていたが，大人になりい

くつかの獅子舞を目にする機会を経て，やはりＣ村の獅子舞はかなり高度なものであることを知った．

富山県教育委員会が発行する『とやまの文化財シリーズ 2 とやまの獅子舞』によると，富山県の獅子舞は主に「氷見型」「五箇山型」「砺波型」「加賀型」「射水型」「二頭型金蔵獅子」「一頭型金蔵獅子」「下新川型」「越後型」「行道型」に分類される．Ｃ村をはじめ高岡市の獅子舞の多くは「氷見型」に分類されるが，当著によれば「氷見型」は「リズミカルな演目が多く，シシゴロシで終演する」ことが特徴であるとされている[3]．

しかし，同じくリズミカルであるとされている「射水型」と比べても，Ｃ村を含む「氷見型」の獅子舞はシリアスなものである．「射水型」では，松明を焚いたり，太鼓や笛のお囃子が前景にあったりと軽快な印象を与えるのに対し，「氷見型」は「シシゴロシ」があることでもわかるように，天狗と獅子が殺し合う真剣勝負として演じられる．そのため，リズミカルでありながらも，獅子や天狗の動きはかなり激しいものとなる．

「シシゴロシ」までを含む「氷見型」の多くは，すべての演目を演じる場合，1 時間以上を要する．そのためＣ村でも，祭礼の前の 1 か月間は毎日練習が行われ，直前の 1 週間は日付が変わるまで特訓が続く．そうして舞われる獅子舞は，子どもの目にも相当のものだと映ったのだろう．Ｃ村の獅子舞は，大人だけではなく，子どもたちにとっても誇りに感じられるものだったのである．

筆者はＣ村から引越した後も，毎年のように獅子舞を観るためにＣ村に戻っていた．修士論文のテーマにしたいと試みたこともあったのだが，諸事情により実現しなかった．だが，修士課程を終えて博士課程に進学した後も，いずれ調査をしたいと思い続けていた．博士課程を修了した年，出身校である金沢大学のあるプロジェクトに携わることになり，石川県の能登半島や加賀地域の太鼓文化の調査を行ったのだが，その調査を行う傍らでやはり，Ｃ村の獅子舞もいずれと考えていた．

その時々で獅子舞への関心のあり方も変化していたが，筆者の専門分野である音楽教育という点からも地域の芸能は重要なトピックになりつつあった．平成 10 年度学習指導要領により中学校で和楽器の取り扱いが義務化され，2006（平成 18）年公布・施行の新教育基本法では「伝統」「文化」の尊重が打ち出されている――「伝統を継承し，新しい文化の創造を目指す教育を推進する」（前文），「伝統と文化を尊重し，それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛する（後略）」（第二条教育の目標）[4]．そのような状況において，2013 年度および 2014 年度に本学の助教特別支援を得ることができ，調査研究を行う機会に恵まれた[5]．

獅子舞がただただ好きでついて歩いていた頃とは異なり，現在はその地域に埋め込まれて育まれた伝統や文化を，学校教育というシステムのなかで扱うことの可能性や問題点を探るという責務があると感じている．主にそうした観点に着目し調査を行っているのだが，それについては別の機会に記すことにして，ここでは地域コミュニティと芸能の存続について考えてみたい．

写真 1：富山県高岡市 C 村の獅子舞（2013 年 4 月 13 日撮影）

天狗の娘

繰り返すが，筆者は引越した後も，祭礼の時期には獅子舞を観たいがために毎年のようにC村を訪れていた．しかしこのたび，改めて調査として戻った村で衝撃的なことが明らかになった．ある村民から，もし筆者が男に生まれていたら天狗になっていただろうと言われたのである．筆者の父は，娘のひいき目を除いても，優れた天狗であった．筆者と同じ年で後に天狗となった幼馴染みTからも，「千尋（筆者）の父さんすごかったって今でも言われとるよ．コツとか聞いてみてよ」と言われたことがある．

先にも述べたように「氷見型」の獅子舞は，獅子と天狗の殺し合いである．しかし，ふと考えてみると，大多数の村人が獅子を担う「獅子方（ししかた）」および「囃子方（はやしかた）」（太鼓，笛，鉦を担当）になるなかで，数の限られた天狗がどのようにして選ばれるのか考えたこともなかった．それが今回の調査で，父親が天狗であることが，次の天狗を選ぶ基準の一つにあることを知ったのである．

C 村には約 10 年前まで，15 歳～ 25 歳の男女で構成される青年団が存在した（現在は青年団 OB がほぼ青年団の役割を担っている）．青年団の活動のもっとも大規模なものが祭礼で舞われる獅子舞であったが，演じるのはすべて男子で，女子には練習中のお茶やお菓子の準備，当日の食事の支度といった役割が割り当てられていた．それでも，獅子舞が大好きだった筆者は，たとえお茶を出すだけであっても獅子舞に携わることのできる日を心待ちにしていたのである．

そのような筆者に対しての，「男だったら天狗」発言は軽いショックであった．後にも述べるが，天狗は獅子舞の主役であり，多くの人が天狗に憧れる．もちろん，仮に男に生まれていたとしても，現実には引越しにより天狗にはなれなかった．しかしそれでも，「男にさえ生まれていれば…」というのが率直な気持ちであった．

天狗の条件

C 村の言い伝えでは，獅子舞が始まったのは約 200 年前であるらしい．1903 年生まれであった筆者の曽祖父が若い頃から獅子舞があったと話していたことを考えても，少なくとも 100 年は経っている．現在の獅子舞は，毎年 4 月の第二土曜・日曜に行われる．土曜の朝，C 村の神社でお祓いを受け，20 班ある各班の班長宅で門付を行う（2004 年までは約 200 戸すべてで行っていた）．演目は 9 種類あるが（ミヤマイリ，マイコン，ヒトツ，マエアシ，フタアシ，ヤシマ，カンショバ，ヨソブリ，コロシ），各班長宅ではそのなかから抜粋して演じられる（「ヨソブリ」「コロシ」は除く）．

この一連の演目には「獅子は田畑に被害をもたらす害獣的な存在で，天狗がそれを退治する」というストーリーがあると理解されているが（小天狗（こてんぐ）がまず獅子をからかい，おびきよせて森の奥に連れて行き，中（ちゅう）天狗が戦って獅子を弱らせ，最後に大（だい）天狗がとどめをさす），「コロシ」まで行われるのは「ハナ」のときのみである．

土曜の 19 時頃から「ハナ」が打たれる．新築や結婚など，慶事のあった家が青年団を「招待」し，「ハナ」を打ってもらうのである．「ハナ」の場合は，「ハナ代」にもよるが，通常より多い演目に加え「コロシ」まで行われるので 1 時間以上をかける．「ハナ」の軒数にもよるが，たいていは日付が変わるまで「ハナ」が続く．翌朝日曜の午前中に神社ですべての演目を舞い，祭礼が終了となる．

約 10 年前まで，村の若者は 15 歳になると自動的に青年団に入団し，ほとんどの団員が「獅子方」になった．「囃子方」は「獅子方」のなかで囃子に興味をもつ者が自主的に教わって担うようになる（現在は小学生以上の女子も複数参加）．しかし「天狗」は違う．約半世紀前までは，子どもだけの獅子舞が行われていたことの名残であるのか，獅子舞の最初の演目は必ず「小天狗」が務める．「小天狗」はたいてい小学校 1 年生くらいから始め，中学生になる頃「中天狗」としてデビューする．そのため，青年団に入団しても「獅子方」にはならず，中天狗を続ける．高校を卒業する頃には「大天狗」となり，「コロシ」まですべての演目を舞う．「小」「中」「大」の最も顕著な違いは担うことのできる演目であるが，中天狗以上が面をつけるという違いもある．

多くの村民が自動的に青年団へ入団し獅子方になるのに比べると，天狗は幼い頃からの選ばれし者という印象がある．しかし，世襲の場合もあるとは言え，どのように選ばれているのかは村民の誰もが知らない．というよりも，青年団そのものに天狗を選ぶルールが存在しないということが明らかになった．

「天狗をつくる」

調査中，たびたび「天狗をつくる」という言葉を耳にした――「（天狗が）誰もおらんようになるから，上の人達（らっち）がそろそろ誰かつくらんなん言（ゆ）うて」，「小天狗ばっかつくってもしょうがない」など．どうやら「天狗」は「なる」ものでも，「選ぶ」ものでもないらしい．

「獅子方」は同時に6人で行うが，特に獅子頭はかなりの重さがあり重労働である．そのため体力が必要とされる獅子方には，どれだけ交代要員がいても良いとされる．それに比べると天狗は，獅子方ほどの人数は必要ない．そこで天狗は毎年コンスタントにではなく，必要に応じて「つくられる」．「そろそろ天狗つくらんなんのぉ」という時期があり，青年団の幹部（団長および副団長）が話し合い，適当な子どもに声をかけるのである．

この「適当な」ということがポイントで，たとえば「じいちゃんが獅子舞好き」という子どももいれば，「いつもつんだっとって（付いて歩いていて獅子舞が）好きそう」という子どももいる．父親が天狗というのは，その「適当な」選択肢の一つであると言うことができる．

現在もOBとして獅子舞に携わるK氏は，「天狗の家（うち）」があったのだと言う．「あんたのお父さんの世代に4人，天狗おったがに，皆，娘ばっかやった」．ある天狗の子どもは娘が二人，あと二人にいたっては筆者の父も含め三姉妹の父親だったのだ．筆者の同級生が天狗になったことを考えれば，筆者の世代はちょうど「つくられる」タイミングにあったということだろう．

天狗と世襲？

だが，なぜ父親が天狗であることが一つの基準となるのだろうか．地区によっては，町や村の外に流出してしまうことを防ぐために，天狗は長男しかできないというところもあるという．獅子方のように交代要員の多くないことを考えれば，後継ぎとして残る可能性の高い長男のみが天狗を受け継ぐというのは合理的だ．だがC村の場合は，長男であるか次男であるかは関係ない．

一応，C村の人々は「家でも指導してもらえるから」という理由を述べる．地区によっても異なるが，先にも述べたようにC村の場合は計9つの演目があり，小天狗，中天狗，大天狗とすすむにつれ担当する演目が異なる．しかし，祭礼前の1か月間，毎日練習するとはいえ，1シーズンで複数の演目を覚えることは難しい．特に中天狗以降は，何年もかけてすべての演目を習得していかなければならない．

そうしたときに，自宅でも教えてくれる人がいるということは確かに合理的である．だが，本当に合理性を目指すのであれば全ての天狗が世襲であるべきであろう．もしくは，「天狗は世襲」というルールが青年団に受け継がれていて然るべきである．だが，実際にはそうではない．事実，現在，天狗として活動している13名のうち，父親も天狗であるという天狗は2名のみであり，あとは叔父が天狗である小天狗が1名いるだけである．筆者はインタビューを重ねるなか

で，本当に目指されている合理性は，演目の習得という側面ではなく，村への負担やコミットの平等にあるのではないかと感じるようになった．

皆の憧れ，天狗

ヒーロー戦隊もののごっこ遊びでは，たいていの子どもがヒーロー役をやりたがる．ワルモノはいつも年長者（保育士や両親，祖父母）の役目になるが，天狗と獅子はこの両者の関係に似ている．以下は，筆者と，もと獅子方で現在は囃子方として獅子舞に携わる青年団 OB の K 氏（1969 年生まれ，インタビュー当時 45 歳）との会話である（2014 年 4 月 4 日）．

筆者「獅子方の方からみて天狗ってどうなんですか．天狗やってみたいってお気持ちっておありなんですか？」
K 氏「そりゃ皆さんでしょうね，99%！」
筆者「それはどうしてですか？」
K 氏「達成感，エクスタシーでしょうね．（獅子方とは）段違いやと思う．（観る人の）9 割は天狗しか観てないから，みんな」
筆者「なるほど」
K 氏「たとえばお宮さん（神社）でやるとしたら，（観ている）おばちゃん達（らっち）の第一声は「あの人（天狗）誰け？」「あの人（天狗）どこの誰け？」やから」

K 氏は 99%の男性が「天狗」になりたいはずだと断言しているが，確かに実は天狗をやってみたいというのは多くの人に共通する気持ちであるらしい．筆者の同級生 T（1981 年生まれ，インタビュー当時 32 歳）もその一人であった．T は「獅子方」として青年団に入団した．高校 1 年生時，2 年生時には獅子方として参加したが，高校 3 年生になる春，天狗が足りないために突如，天狗をやるようにと言われたのだという（2014 年 3 月 28 日）．

筆者「（急に天狗をやるように言われて）いやじゃなかった？」
T　「そうそう，天狗の方が目立つ感じやし」
筆者「そんなふうに思っとったが？」
T　「子どもちゃ，祭り好きやよね．コロシとか．天狗やってみたいって気持ちあっても，そんなチャンスもなかったし」
筆者「じゃあ，天狗やることになったとき嬉しかった？」
T　「高 3 やったから勉強もせんなんかったし，でもやろうかなって思った」

T の父親が，T が天狗としてデビューして以降，ビデオを撮り始めたというエピソードはまさ

に多くの人が「主役は天狗」と感じていることを象徴しているのではないだろうか．T は「(T が）獅子やっとったときはそんなことせんだがに（しなかったのに)」と笑いながら話していたが，子どもがヒーローに感情移入するのと同じで，観る人の多くは獅子に対峙する天狗を応援するのである．

そのためか，C 村では天狗のスタイルを皆が気にする．地区によっては，その方が獅子が大きく見えるということから小柄な天狗が好まれるところもあるというが，C 村は「すらっとしとる」ことが非常に重視される．その方が「見栄え」が良いのだと言う．ヒーロー戦隊もののリーダー的存在であるレッドのルックスが重視されることと似ているだろうか．

タブー視される天狗への立候補

だが興味深いのは，それほどまでに皆が天狗に憧れるにも関わらず，「天狗になりたい」と発言することがタブー視されているということである．現在も OB という立場から大天狗として獅子舞に携わり，後進の指導にもあたる Y 氏（1976 年生まれ，当時 37 歳）には小学生の娘が 2 人おり，特に長女は筆者と同じように天狗になりたかったのだという．Y 氏は，長女に「女は天狗になれん」と話したときにはショックで泣きそうになっていたと話していたが，Y 氏の兄の息子，つまり Y 氏の甥が小天狗として数年，参加している．以下は，筆者と Y 氏の会話である（2014 年 3 月 26 日）．

筆者「甥っ子さんが天狗になられたときは嬉しかったですか？」
Y 氏「そうやね，でもタイミングやね．声かからんなん，こっちからは言われんちゃ」

現在，活動している天狗は 13 名いるが，立候補したという天狗は誰もいない．心のなかでは天狗になりたいと思っていても，「やりたい」と言うことはタブーであるようである．というよりも，天狗は人知を超えた何者かに「つくられる」運命であると捉えられていると言っても過言ではないように思える．

99％の人が本当は天狗をやりたいと思っていると断言した K 氏にしても，青年団入団当時は，天狗になれないことも，なぜ天狗になれないのかも疑問にも感じていなかったと言う（2014 年 4 月 4 日）．

（皆が本当は天狗をやりたいと思っているという話題から）
筆者「では青年団に入られて，獅子方になられて，本当は天狗やりたかったなって思っておられたんですか？」
K 氏「いや，当時はそうは思わんかった．30（歳），40（歳）になってからかなぁ．自分のときは天狗は天狗と決まってましたから．1 軒，2 軒，3，4，5 軒くらいの中から（天

狗を）チョイスする．どうしても調達できん場合は高校生なってからとか，他の家から，とか」

筆者「その 5 軒ってどうやって決まったんですか」

K 氏「どうしてやろうね !? 永遠の謎！誰も知らない！」

つまり，K 氏は「天狗の家」に生まれなかったことで，自分は天狗にはなれないことを受け入れており，どのようにして「天狗の家」が決まったのかも考えることがなかったということである．

運命としての天狗

筆者は天狗をめぐる話を耳にするなかで，天狗が「つくられる」ような状態が保たれることで，「選ぶ」という行為が避けられているのではないだろうかと想像するようになった．そのために，天狗は誰かが「なる」ものでも，「選ぶ」ものでもなく，「つくられ」なければならないのである．

また，「なりたい」と発言することがタブー視されている一方で，「なりたい」という意思を行動で表すこと，そして天狗として「つくられる」ことは実際に起こり得る．立候補はタブーであっても，意欲を見せることで「つくられる」対象になることは構わない．つまり，「なる」のではなく，「つくられた」という事実が大切なのである．

たとえば現在，中学校 2 年生の中天狗 N くんの父親は天狗ではない．N くんの父親は関西出身で結婚によって C 村に移り住んだため，青年団としての活動の経験もほぼない．だが N くんは，同居している祖父と一緒によく練習を観に来ていたのだと言う．「よく練習を観に来る」という行為が，「（獅子舞が）好き」「練習に来る意欲がある」とみなされ，小学生になる頃に天狗として「つくられ」た．

筆者の父もそうであったらしい．今回の調査を行うにあたって，初めてなぜ父が天狗であったのか尋ねてみた．父いわく，「いっつも練習行って天狗の真似したり，離れんもんやから，おまえそんなに好きならやってみるかゆうて言われて」，小天狗を始めたのだという．そんな父は，東京の大学に通っていたときも獅子舞のために帰省し，青年団を引退しても大天狗を続けていた．年とともに頻度は減っていたようだが，筆者が小学生の頃にも，祭礼当日の夜には青年団の団員が「お願いします！ハナやる人おらんがです！」と訪ねて来たことを覚えている．父の最後の舞いは今でも忘れられない．

根拠なく「C 村！」

話はそれたが，天狗が「つくられる」ものであることの背景には，C 村の紐帯の強さがあるの

ではないだろうか．筆者もそれほど複数のコミュニティで暮らした経験があるわけではないが，C 村は紐帯の強い村である．ほとんどの家が兼業農家であることとも無関係ではないだろう．農作業では，同じ種類の作業を同じ時期に行うことが多い．自然と，田や畑で，向き合って，隣り合って作業をすることになる．高価な農機具を共同で購入することもある．名前も顔も知らない関係ではいられない．

しかし，筆者が引越後に住んだ K 村も農村である．さまざまな近所づきあいがあるものの，C 村の比ではない．たとえば，C 村にはこれほどまでにコミュニケーションツールが発達した現代においても，重要な連絡事項は電話を使ってはいけないという不文律がある．直接，相手の家に出向いて，顔と顔を突き合わせて話すということが重要であるようだ．Y 氏にインタビューを行っていたとき，なぜ C 村は結束が強いのかという話題になった（2014 年 8 月 20 日）．

Y 氏「小学生のときからそうじゃなかった？　縄張りゆうか，意識？　C 村に，他の町内の子どもおったら「よすけ」って言ったり（筆者注：よそ者の意味）．なんでかはわからんけど，根拠なく，「C 村！」なんだよな」

C 村周辺には同じように兼業農家の多い町村はいくつもある．C 村だけに特別な産業があるわけでもない．なぜ C 村の家々が，これほど互いに密な関係であり続けるのかはわからない．だが，この C 村の紐帯の強さが，完成度の高い獅子舞を保ってきたと言えるのではないだろうか．

これも，インタビューを繰り返すなかで初めて知ったことだが，すべての村民が獅子舞が好きで積極的に関わりたいと思っているわけではない．考えてみれば，皆が筆者のようなお祭り女ではないのである．実は獅子舞が好きではないという声も聞かれたし，関わっている理由を「つきあい」「義務感」であると述べる人もいた．

かつての青年団は今よりも厳しかったと皆が口をそろえて言う――練習中に座ることは許されなかった，野外の練習でまだ空気が冷たい中でも半袖にならずにいられないくらいだった，等々．それでも C 村の紐帯は，個々の村民に，青年団として獅子舞に携わることは当然であると感じさせてきたのだろう．そうすることが，C 村に生まれたからにはついてくる運命であると．つまり，天狗が「つくられる」存在であり，「なる」「ならない」「選ばれる」「選ばれない」という選択肢がないように，獅子舞に携わるか携わらないかという選択肢が個人にはなかったのである．

C 村の紐帯は，そうしたいわば個人主義を抑圧する作用を伴っていたのではないだろうか．獅子舞が好きではなくても好きではないとは言わない，天狗をやりたくてもやりたいとは言わない．個人的な感情を口には出さず，平等に時間と労力をそそぐ．獅子方にしろ，囃子方にしろ，天狗にしろ，与えられた役割を担う．こうして，C 村の高度な獅子舞は保たれてきたのだ．

C 村獅子舞の将来

こうした類の村の不文律は，時代錯誤であるという印象をもたれるかも知れない．事実 C 村でも，時代錯誤というよりも，現実としてもはや効力がなくなっている．約 10 年前に青年団が事実上消滅してしまったのも，理由は少子化だけではない．かつては全員が入団し，25 歳までは続けていた青年団に，入らない，もしくは途中で抜けるという選択をする若者が増えたのである．

青年団の OB らは「頭よくなったら獅子舞，来(こ)んようになる」と言う．大学進学のために獅子舞の練習に来なくなるという意味であるが，これは表面的な理由に過ぎない．県外の大学に進学しても続ける人もいるし，大学に進学しなくても続けない人もいる．つまり，かつて誰もがやらなければならないことだと受け入れていた青年団としての役割が，そうであるとは感じられなくなったということなのだろう．全国のいたるところで，祭礼の「担い手不足」が叫ばれ，過疎化や少子化がその理由とされる．だが，C 村の例だけを言えば，村の紐帯にコミットすることの自明視が失われつつあるということの方が直接的な理由なのではないだろうか．

繰り返すように，C 村の獅子舞は高度なものであるが，その完成度はさまざまなこだわりによって保たれている．たとえば，町村によっては 50 代でも天狗をつとめられるところもあるが，その激しさゆえに，C 村の場合は青壮年でなければ不可能である．近年では，担い手不足により 30 代後半の村民も担ってはいるが，1977 年生まれ（2014 年 3 月当時 36 歳）の天狗 S 氏は仕事の関係もありときどき走り込みを行うと言うし，その 1 歳上の Y 氏（2014 年 3 月当時 37 歳）は「スペア」を使っていると言う（本来は一人で行う演目を体力を温存するため気づかれないように途中で入れ替わる）．

だが，さまざまなこだわりと現実をすり合わせることで獅子舞を維持している町村もあり，C 村にもその余地がないわけではないと思われる．もちろん，C 村にしてもいくつかの変化はあるのだが（約 200 戸全軒で門づけを行うことから班長宅 20 軒のみへ，女子厳禁から笛は女子も可能，など），完成度を下げるということにまでは及んでいない．

C 村の，現在の青年団 OB の事実上の代表は「もってあと 5 年やろう」と話す．青年団に若い人が定着せず，活動する面々の平均年齢は上がるばかりという状況では，担う人がいなくなってしまう．こうした状況を含めて外部の目でみると，C 村には，①完成度を保ったまま 5 年以内に消滅する，②妥協する（完成度を下げる）ことで続ける，③完成度を維持するために何らかの手段をとる（青年団入団の強制化など），という三つの選択があり得ると言える．現状では，③の案が話題にのぼることはあるが，②についてはほとんど話されていない．

C 村の人々はここ数年，毎年，「今年でっきっかのぉ（できるのだろうか）」と言い合っているのだという．C 村獅子舞の一ファンとして，何かできないだろうかという気持ちはあるのだが，具体的な事柄は思い浮かばない．とにかく来年も 4 月に祭礼がある（予定）．3 月後半からは毎

日の練習が始まる（予定）．再び調査に向かうつもりだ．

注

1）「獅子魂」（獅子舞の再生と活性化を目的としたプロジェクト．企業や団体のサポーを募り，獅子舞についての情報を発信している）ホームページ．http://shishi-kon.com/（2014 年 11 月 10 日アクセス）．

2）「富山獅子舞集団・舞獅道」（祭礼という文脈ではなく，各種イヴェントに対応できる獅子舞の提供を目指す団体）ホームページ．http://bushidotoyama.jimdo.com/（2014 年 11 月 10 日アクセス）．

3）富山県教育委員会文化財課，2006,『とやまの文化財シリーズ 2 とやまの獅子舞』富山県教育委員会文化財課，p. 2

4）文部科学省ホームページ http://www.mext.go.jp/（2014 年 11 月 10 日アクセス）．

5）研究課題名「日本の伝統音楽文化の伝承形態―富山県高岡市の獅子舞を事例として」．